

60歳の
いまだから
わかる

ON OFF

40代に 絶対にすべきこと！③

とはいえ、あまり無理のきかない年齢でもありませんから、自分の体調を整えることも考えなければなりません。40代以降では、ふと忙しくなくなる転機が出てきます。ですが、時間にゆとりができるとかえって体調を崩すこともありますので、自分のリズムをくずさない。早く帰れるようになったのなら、趣味や家族と過ごすなど時間の使い方はいくらかもありません。休日出勤しないのでよいからといって、一日寝ていてはかえって体がだるくなりますし、何も生まさない。定年退職や独立などで毎朝、会社に行かなくてよいことになっても、好きなときに起きて寝たいときに寝るのではなく、毎日決まったリズムで過ごす。休日に家でゴロゴロしているお父さんがイヤがられるように、リズムやメリハリのない過ごし方は、人をだらしなくし、精彩を欠いてしまいます。

それは、51歳のときに吉本興業の常務取締役に就任し、56歳で会社を辞めました。もったいないうまく言われたものですが、「自分にとって楽しい場所がなくなったらいつでも辞めよう」とずっと思っていたので、自分ではまったくもったいなくなかった。当時の私には目的がなく、この会社で何をしたらいいのかもわからず、仕事がおもしろく感じられなくなっていました。人生の貴重な時間ですし、できるだけのことばやってきたら思っていたので、つまらないと感じる会社にそのままいたくなかったのです。それで自分の事務所をつくって、独立しました。それまでのものをすべて捨て、一度、空っぽになってから、次に何をするかを考えました。そのほうがいままでの延長ではない新しいことができるからです。いまの事務所では、講演や執筆活動、エンタテインメント事業のプロデューサー、人間力養成講座「有名塾」、50代のためのフリーマガジン「5L（ファイブエル）」の発行など、吉本興業にいたときにはできなかったいろいろな仕事をしています。

きむら まさお
1946年京都市生まれ。69年同志社大学卒業後、吉本興業(株)入社。横山やすし・西川きよしのマネージャーを8年間務めたのち、東京事務所をはじめ、吉本興業の全国展開を推進。2002年に退職し、フリープロデューサーとして、講演活動、テレビ・ラジオ出演のかたわら、50歳からのフリーマガジン「5L（ファイブエル）」の編集長を務める。



60歳の
いまだから
わかる

ON OFF

40代に 絶対に すべきこと！③

振りかえって思う、40代にやっておくべきことを、フリープロデューサーの木村政雄氏に聞いた。前号までは、40代の前哨戦である30代について、また、40代の仕事のあり方について見てきた。今号では、40代のプライベートの過ごし方と、50代以降の心得について。



フリープロデューサー
木村政雄

自分の引きだしを増やす

私自身にONとOFFの切りかえという区別はありません。吉本興業にいたときも、フリープロデューサーになってもでもそうです。どこまでが仕事でどこからがプライベートかというのがわかりにくい仕事でもありますし、ほとんど休まず働いていたともいえます。

40代のビジネスマンは仕事に忙しいことが多いです。ONとOFFの切りかえがむずかしいことや、家には寝に帰るだけ、たまの休日は疲れをとることに専念する、という人もいます。いずれにしても、気持ちの切りかえというのは大事ですね。私の場合は大阪と東京

を行き来する新幹線で「ビジネスの東京モード」と「人間に帰る大阪モード」を切りかえています。気分転換という意味もありますが、自分のモードの切りかえどころをもつことで、引きだしが増えて人間の幅が広がります。

「四〇にして感わず」といいますが、いまは40代になって感う時代ではないでしょうか。高度成長時代の日本というのは、「いい学歴でいい会社に入っていい地位を得れば、高い収入を得て多くのものを手に入れることができる」と「have」と「do」に重点を置いていました。しかし、がむしやりに仕事をして、家庭をもち、車をもち、マイホームをもつことをめざしてきた人は、40歳ごろになって、「さて、これからどうしようか」と迷ってしまうことがあります。

限界は自分が決める

私は、51歳のときに吉本興業の常務取締役に就任し、56歳で会社を辞めました。もったいないうまく言われたものですが、「自分にとって楽しい場所がなくなったらいつでも辞めよう」とずっと思っていたので、自分ではまったくもったいなくなかった。当時の私には目的がなく、この会社で何をしたらいいのかもわからず、仕事がおもしろく感じられなくなっていました。人生の貴重な時間ですし、できるだけのことばやってきたら思っていたので、つまらないと感じる会社にそのままいたくなかったのです。それで自分の事務所をつくって、独立しました。それまでのものをすべて捨て、一度、空っぽになってから、次に何をするかを考えました。そのほうがいままでの延長ではない新しいことができるからです。いまの事務所では、講演や執筆活動、エンタテインメント事業のプロデューサー、人間力養成講座「有名塾」、50代のためのフリーマガジン「5L（ファイブエル）」の発行など、吉本興業にいたときにはできなかったいろいろな仕事をしています。

自分を魅力的に見せる

「自分」の姿には、自分が思っている自分と、人から見た自分という二つがあります。一般的に、歳とともに自分の見た目にかまわなくなってしまうのですが、歳をとるからこそ、自分を魅力的に見せる努力は必要な「務め」。魅力的でなければつまらないですね。男性でも女性でも、人から振りかえって見られたり、「魅力がある」と思ってもらえるほうが絶対いい。といっても、自分の本質を変える必要はありません。「人から見た自分」を魅力的にすることは、演技やテクニクでできることです。

「自分」というのは服装も含めてのパッケージ商品です。たとえば、買い物をしなくてもデパートなどに足を運んで、普段から気をつけてリサーチしておく。自分を演出することに興味をもっているだけでも違ってくると思います。

また、好奇心をもつことも、いくつになっても大切です。とくに男性は上昇志向で、「縦に飛ぶ」ことしか知らない人が多いですから、意

う」という意味でつけた誌名です。そして同時に、50歳はまだ人生の半分、一〇リットルの半分の五リットル、という意味も込めています。50代は人生の終盤ではなく、まだ半分と考えるべきだと思います。もちろん誰もが100歳まで生きられるわけではありませんが、「どうせもうすぐ終わる人生」と考えていては何もできません。体力の衰えなど、老いを感じる年齢ではありませんが、「歳をとった」と思ったら本当に老けてしまう。老化なんて認めない。限界は自分が決めるものです。

人生には三つの「定年」があります。雇用の定年、仕事の定年、それから人生の定年。雇用の定年と人生の定年は自分で決められるものではないかもしれませんが、仕事の定年は自分次第です。60歳でも70歳でも、自分がやりたいだけ、楽しんで仕事をして、好奇心をもち、新しいことにもチャレンジし、イキイキとカッコよく過ごしたいものです。